

特集

**PRESIDENT INTERVIEW**

片峰学長が語る  
進化し続ける  
長崎大学

聞き手／  
本誌編集長 原田哲夫

長崎大学広報誌「Choho」は、この2015年1月発行で50号目を迎えます。  
そこで、3期目を迎えた片峰茂学長に  
「長崎大学は、今後どう進化していくのか」をテーマに、語っていただきました。  
特集後半では、インタビュー中に出てきたキーワードを詳しく紹介します。



# 社会が変化すれば 大学の目標設定も 変化させなければ

長崎大学でしか学べないもの  
六年間で達成度は五十%

原田 二〇一五年の年頭にあたり、  
長崎大学長である片峰先生に長崎大  
学の今後の展望を語っていただきま  
しょう。

まず、二〇〇八年に学長の任にあ  
たられ、昨年十月に三期目が始まっ  
たわけですが、就任されたときに描い  
ていた抱負が、どの程度実現したか、  
という点からお伺いできますか？

学長 そうですね。就任当初持っ  
ていた目標の七割は達成できたと言え  
ます。しかし、社会の要求が高まる  
ことにより、到達すべき目標も高く  
なっている。したがって現時点で考  
えると、達成度は五十%ほどになり  
ます。私は大枠として「長崎大学に  
しかないもの、ここに来なければ学

長崎大学長

片峰 茂

長崎大学医学部卒業。東北大学大学院医学研究科修  
了。医学博士。専門はウイルス学。特にプリオン。長崎大  
学医歯薬学総合研究科教授。長崎大学国際連携研究  
略本部長。長崎大学学長特別補佐などを経る現職。



1

ヘルス研究科(修士課程)」のキック  
オフイベントなのです(P7)。

熱帯病や感染症と医療とのかかわ  
りは、かつての、植民地で働く宗主  
国の人間のための医療の時代、先進  
国から途上国への医療援助の時代を  
経て、グローバル化が進む現代では  
様変わりしています。昨今のエボラ  
出血熱の感染拡大のように、熱帯感  
染症は途上国に限定された問題では  
もはやなくなりました。また、生活  
が豊かになった途上国では成人病が  
増えています。つまり、先進国も途  
上国も協力し合いながら様々な問題  
に取り組み、それが「グローバルヘ  
ルス」です。

原田 なるほど。となると、熱帯医学  
研究所(熱研)の存在が重要ですね。  
学長 そう、長崎大学の強みの一つ

です。熱研には熱帯病や感染症など

の熱帯医学に関して非常に強力な研  
究者集団と教育組織があり、この分  
野では、五十年以上にわたり長崎大  
学が日本をリードして来ました。こ  
れを基盤としながら、世界で活躍で  
きる医療人を育てるための「熱帯医  
学・グローバルヘルス研究科」が動

き出します。

また、もう一つの強みである原爆  
後障害医療研究所(原研)の研究者  
にしても、東日本大震災による福島  
の原発事故のなかで圧倒的な存在感  
を発揮しました。そして今もなお継  
続して多くの研究者が福島で活躍し  
ています。平成二十八年度、福島県

原田哲夫

本誌編集長

工学研究科教授。九州工業大学大  
学工学研究科修士。工学博士。東京大  
学取得。一九九七年より長崎大学教  
授。専門はコンクリート構造学。

グローバルヘルスに

医学部だけでなく

他学部も参画してゆく

道筋を考える

2

立医科大学と共同で、放射線医療に  
特化した新しい修士課程を作る計画  
もあります(P7)。

原田 熱研だけでなく原研も新しい  
動きがあるのですか。まさに新時代  
の社会のニーズに対応した医療人育  
成のプログラムですね。

学長 いずれも世界規模で問題に  
なっている「環境要因」に根差す疾  
病に関する専門家を育成します。し  
かしそれだけではありません。この  
「グローバルヘルス」の概念は医療  
や保健に限らず、社会科学や経済、  
ものづくりなど、さまざまな分野に  
求められています。つまり医学部だ  
けでなく、他の学部の研究者や学生  
が参画していく道筋を考えていき  
たいのです。

原田 それは新しい展開です。強み  
を核にししながら、他の学部にも新し  
い風を送り込むわけですね。

グローバル人材に必要な  
新しい力を育む挑戦

学長 もともと長崎大学には「現場  
に強い、行動力がある」という個性  
があります。私はそれに「コミュニ  
ケーション力、問題発見&解決力」  
を新たに加えることで、バランスの  
いいグローバル人材が育つと考えて



います。これが二つ目の到達ビジョンです。

原田 現場に強くて行動力があり、問題発見や解決力もある。人とコミュニケーションもとれる。

学長 国際プロジェクトで働く場合、例えば医療やものづくりのプロであっても、その国の政策や文化がわからなければ通用しません。これが日本の大学教育の弱点でした。そこで、三年前から新たに取り組んでいるのが教養教育改革です。

原田 「モジュール」と「アクティブラーニング」ですね(P8)。我々教員の講義への取り組み方も変化しています。

学長 新しいシステムなので、教員も学生のみならず慣れるまで大変だったでしょう。また、全国に先駆けて長崎大学が始めたことで、全国の大学からも注目されており、私もよく研修会などに呼ばれて発表しています。どちらも学生の立場から考えた改革です。これまでの教養教育では、学生が一科目ずつ好みで選んでいたため、関連性がないこともしばしばでした。そこで教養科目をテーマごとに八、九科目ずつ二十五のグループに分けた集合体「モジュール」を作り、それを選択して一年半じっくり学ぶスタイルに変えま

3

全国でもトップクラス。海外留学奨学金のほかにTOEICの受験費用、院生が教員のサポートを有料で行うティーチング・アシスタントやリサーチ・アシスタント制、そのほか大学独自の奨学金など、学びの環境整備が進んでいます。

原田 授業料四十%弱還元ですか！それは学生や保護者には見逃せないポイントですね。

### 長崎という地域のなかで 唯一無二の存在になる

原田 しかし今後、少子化の流れは止まらず、大学に吹く風は厳しいのではないのでしょうか。

学長 十年後の風景はがらりと変わり、大学も今の半分くらいは淘汰されるとも言われています。少子化で量的ニーズは下がるものの、若者には世界を舞台に活躍することが求められ、質的ニーズは上がります。私は、地方創生のカギは大学にあると考えています。早い話が長崎大学のような大学があるということは、十八歳から二十七歳の若者一万人がその地域にいるということ。これは大きい。文部科学省でも大学改革の柱の一つとして「地域再生の核となる大学づくり」をあげています。今

5

した。同じモジュールを選んだ学生は六十〜七十名で、学部の垣根を越えて共に学ぶ「学びの共同体」です。刺激し合いながら、学生同士はもちろん、学生と教員のコミュニケーションも育まれます。しかも、これまで高校や大学ではなかった「アクティブラーニング」という、参加型の授業です。

原田 最近ようやく先進的な高校などで取り入れ始めているようです。一方的な講義とそれを記憶するだけの学習から、積極的に発言して表現する力で、自分で学ぶ力、行動する力、コミュニケーション力が育まれるというテレビ報道もありました。

学長 みんな言葉は知っていても、どうやって大学の授業に反映させるのかわからない。具体的に実施しているのは長崎大学だけです。また、

## 日本の大学教育の

## 弱点に切り込む

## 新しい教養教育

# 長崎大学でしか 育てられない人材を 輩出する

後、長崎大学が地方創生のカギとなり、「長崎には長崎大学が必要」と言われる存在感を持つこと。これが三つ目の到達ビジョンです。

原田 昨年末に発表された、全国の国公私立大学の「地域貢献度」総合ランキングで、長崎大学は七百四十七大学中、五位と健闘していました(日本経済新聞社・産業地域研究所調べ)。

学長 そうでしょう。たとえば、長崎大学核兵器廃絶研究センター(RECNA)は稼働し始めて四年目ですが、すでに日本において核兵器廃絶はRECNAなしでは語れないと言われるほどで、核兵器廃絶関連の情報収集や発信において存在感があります。また、長崎県の「海洋エネルギー実証フィールド」への参入など大きなプロジェクトも動いてお

ネット上で教材を提示して予習復習もできるICTシステムなどもあり、いずれも学生や教員のパフォーマンスの数値は上がっています。もともと、どんなシステムも最初は不具合がありますから、今後、試行錯誤しながら、より力のつく教養教育に進化させたい。これは、日本の新しい教育システム構築のための、言ってみれば壮大な試みです。

原田 それから大きな動きとしては、今年度から「多文化社会学部」が創設されました。

学長 長崎大学待望の人文社会学部、これは私の長年の夢でもありました。せっかくまっさらな状態から立ち上げる学部だから、目指すべき学士像のロールモデルを一足早く作ってみせる、そんな意気込みで実現させました。幸い、全国から集

り、長崎大学の研究者の役割が期待されています(P10)。

原田 海洋エネルギーといえば工学部と水産学部の出番ですね。

学長 その通り。水環境、水資源に関する研究領域は、ほかの大学にはない強みです。次世代エネルギーのなかで、とりわけ海洋エネルギーは長崎県にとつて非常に意味があります。海に浮体を浮かべて風車を回す、潮流でタービンを回す、または藻類の光合成でバイオマスエネルギーを作る。もちろん環境アセスメントも行い、産出されたエネルギーを漁や養殖などにも活用する。エネルギーの地産地消です。この長崎県モデル実現にあたり、企業の人材育成が長崎大学に求められています。成功すればアジアやアフリカの途上国にもモデルを輸出し、海洋や水資

まってきた学生はみんな非常に頼もしい。成功したなど思っているのは、これまでの常識にない奇抜な入試をしたこと。とにかく英語の力を重視、そして「批判的・論理的思考力テスト」の二つです。偏差値も通称せず、全国の高校の進学指導の先生を悩ませました。それでも学生たちは自分でこの学部を選んでくれました。

原田 多文化社会学部の先生にお聞きしたら、授業にも積極的に取り組み、目が輝いているのだそうです。

学長 一年前期で徹底的に英語力を鍛え、TOEFL ITPの平均点数も五〇〇点を超えました。夏休みには六十人がカナダと米国の大学に語学研修に行ったところ、先方の大学での評価が非常に高い。これまでの日本からの学生とは全然違う、と(P9)。二年目も期待しています。

原田 他の学部でも海外研修や短中期留学のプログラムが活発化していますね。やはり大学生のうちに海外を体験するのは重要です。

学長 長崎大学では海外留学には七、八万円の奨学金制度があります。ほとんど活用してほしいですね。あまり表に出ないことですが、実はうちの大学は、授業料の約四十%弱を学生の教育に還元しており、これは

4



長崎大学のこれからについて熱く語る片峰学長(右)と、原田編集長。オープンな場所ですごく話されたトピックスもいくつかありました。